

郷土鹿児島が生んだ昭和の釣りの碩学松崎明治を語る

著者	不破 茂
URL	http://hdl.handle.net/10232/21678

(講演内容文字起こし)

鹿児島大学附属図書館水産学部分館は、去る6月2日にリニューアルオープンしました。これを記念し、所蔵する松崎文庫の企画展示および講演会を開催することにしました。本日講演される、不破先生の経歴を簡単に紹介させていただきます。不破先生は1970年に鹿児島大学大学院水産学部研究科修士課程で漁業学専攻を修了されました。同年7月に水産学部助手に採用され、水産学科漁具学講座に勤務されています。また1988年に北海道大学において水産学博士の学位を取得されています。1998年に水産学部教授に就任され、水産学部副学部長を経て2014年4月から鹿児島大学附属図書館水産学部分館の分館長に就任されています。学会活動としては、日本水産学会、水産工学会、アジア水産学会に所属され、主に漁具の設計と性能に関する研究、道具に対する魚の構造の研究を専門にされ、教育面では練習船を用いた韓国の大学とのセミナーなども主宰されています。それでは『郷土・鹿児島が生んだ昭和はじめの碩学 松崎明治を語る』というテーマで講演を行います。先生、よろしくお願いします。

ただ今ご紹介いただいた水産学部の不破です。水産学部には「松崎文庫」という釣りに関する書籍群があります。これは長い期間、眠っていた貴重な資料です。私は今から20年ほど前に、こうした書籍群があるということを知り、それから徐々に整理を進めてきました。平成16年頃からは一般開架もできるようになりました。今回のリニューアルに合わせて文庫を個室で展示することが、図書館の職員の方のご尽力で実現できました。そこで今日は松崎明治についてお話をさせていただきます。

日本の釣り文化を語るときに、松崎明治は不可欠な人物です。戦前の方ですが、どういう人物だったのか。

松崎さんが川辺中学卒業ということはわかっていましたが、ご出身は川辺町ではなく知覧町だったといことが、その後の調査でわかりました。

なぜ松崎さんの書籍群が水産学部にきたのか。前身の水産専門学校に寄贈されていますが、その経緯はどういうものであったか。それは、これから私なりに推理したいと思います。そのキーになるのが烏賊曳きだろう、ということで、烏賊曳きの話をさせていただきます。

松崎文庫は、蔵書が約300冊、雑誌が約300冊、計600冊あります。代表的なものに『写真解説日本の釣り』(昭和13年)、『釣り技百科』(昭和17年)があり、これらは釣り本の古典と呼ばれています。“日本版釣魚大全”と言ってもいいものです。そして釣り雑誌に寄稿されたもの。リストは、こういうものです。飛びぬけて多いのは、釣魚に関するものですが、その他にも幅広く調べられています。雑誌については気軽な読み物風の記事やエッセーもありますが、基本的には非常に学者肌というのでしょうか、釣りというものを科学的にとらえていました。

寄贈は昭和24年と27年の2回にわたって行われました。松崎さんは昭和25年にお亡くなりになっていて、寄贈は生前に一度、そしておそらく三周忌の遺品の整理の後で2回目の寄贈がなされたのだらうと思います。

水産学部において松崎文庫がどういう位置づけなのか。これは釣りと漁業技術に関する貴重な資料群です。江戸時代から昭和10年代までの漁業資料が網羅されています。

魚を獲る技術の研究は、延縄や巻き網、トロール網といった大規模漁業にばかり集中していて、一本釣り漁業は見過ごされがちな傾向がありました。現在でもそういう風潮が続いています。水産資源の持続的活用が水産業に課せられた使命であり、資源を再生する漁業技術として、釣りはもっとも基本的な技術であると思います。それを考える上で、松崎文庫は非常に良い資料です。

この文庫は、大学間で争奪戦が繰り広げられました。新生鹿児島大学ができたのと同じころに広島大学もでき、広島大学水畜産学部ができました。初代の広島大学学長をされていた森戸辰男さん、中教審会長で「期待される人間像」をまとめたことで知られる方ですが、この森戸さんも非常に松崎文庫を欲しがりました。朝日新聞の人脈を通じて何とか入手しようと努力しましたが、「夢がかなわず残念だった」と語っていたことがあります。その事実をきっかけに、私も松崎文庫の存在を知ることになったのです。

松崎明治さんは、早稲田大学・哲学科出身です。商学部から哲学に移り、大学を2回卒業されています。そして新聞記者をしながら釣り博士になりました。非常に客観的なものの見方をされる方です。『釣り技百科』を著しているの、エンサイクロペディストでもあります。この本は、その後の釣りの入門書に大きな影響を与えました。『写真解説 日本の釣り』、これは当時の空気そのものを映し込んでいます。昭和10年代に個人がカメラを持つということは、非常に大変なことでした。そんな時代に、松崎さんはカメラを持って日本中を歩いているのです。釣りそのものではなく、釣り方、餌、道具、餌のつけ方まで、細かく記録されています。対象となるのは、遊び釣り、職業釣り、さらに少年のフナ釣りから、旦那衆の粋な遊びだったタナゴ釣りまで、非常に幅広く扱っています。

松崎明治と並んで有名な釣り研究家に佐藤垢石がいます。両者とも新聞記者です。朝日と報知新聞でそれぞれ釣り欄を担当していました。佐藤垢石さんは戦後有名になっていく方ですが、釣りのとらえ方は松崎明治と180度違います。松崎さんは、釣りは「漁」のひとつである、ととらえていました。佐藤さんは、「いかに楽しむか」ということを念頭に、スポーツ新聞的な書き方をします。2人にはそういう特徴があります。事実を淡々と書くのが松崎さんのスタイル。佐藤さんの記事には「どこで釣ったの?」「とったぞ、すごいだろう!」というような、タイトルがつけます。そして最後に佐藤さんの名前が入る。そういう違いです。松崎さんは、署名記事を書くことがありませんでした。

『写真解説 日本の釣り』は、日本で最初の釣りの写真集です。写真が166枚掲載されています。釣りの技術は、地方ごとに独自性があります。それぞれの土地や対象魚によって、独特な釣りがある。それを写真で記録することで、各々の特徴がよく伝わるだろうと。そういうことで、約7000枚の写真を撮ったそうです。昭和10年代に7000枚の写真を撮るといことは、とてつもないことでした。カメラ自体が庶民には手を出せない超高級品であり、さらに膨大な量のフィルムを確保するのは大変なことでした。知り合いのカメラマンに聞いたら、当時はロバート・キャパが愛用したライカが世に出たばかりのころで、日本人で買った人はごく限られた層だったはずだ、ということです。

撮影は、“水が高きから低きに流れる如く”で、溪流釣り、湖の釣り、中流域の釣り、低地の釣りというふうに分けて行われています。海の釣りは、岸から歩いて渡れるところから始まり、船釣り、鯛釣り、その他の沖釣りに分かれています。取材場所は勤務地の関係上、東京中心にならざるを得ません。しかし奥入瀬や、十和田湖、白神山地周辺の釣りも取材していますし、飛騨から白川郷、四国も訪れています。九州では球磨川、鹿児島湾、枕崎など。やはり地元の鹿児島は大事にされたようです。こうして撮影した7000枚から厳選した166枚を掲載しています。

写真を見て特徴的なのは、餌のつけ方や道具、これはいわゆるヘラ、スプーンですね、それを使った技術まで紹介している点です。これは手釣りをしている写真です。

この写真は、芦ノ湖のブラックバスです。赤星鉄馬という人が昭和のはじめにブラックバスを芦ノ湖に放流するのですが、当時は船頭が釣り場へ釣り客を運んで、箱メガネで水中を覗いて「ここにいますよ」と教えて釣らせていたんですね。お客さんは「釣らんかな」というふうに構えている。今ではとても考えられないような釣り方ですね。

鮎の解禁はビックイベントだったようです。多摩川では、隣の人と肩が触れるほど竿が並んでいます。これはドブ釣り、毛針釣りだと思います。友釣りではこんなことはできません。解禁日に、どこの川でどれくらい

釣れそうか、という記事を書いています。短い期間ですが、鮎も一時的に餌を食べる時期があります。そういうときに毛針釣りをする。今では無くなった釣りです。

これも同じく、もう無くなった釣りで、カエルを餌にしたナマズ釣りです。餌のカエルをつけて、水面をポチャンポチャンとたたくんです。するとナマズがポンッと飛び出してくる。釣れたナマズは、ここを掴むんですね。次のページには、ナマズではなくて大きなカエルが釣れた、という写真が載っています。

その他、夏休みの少年の釣りや、冬枯れの葦原で釣り人が1日釣りをしている写真、タナゴ釣りの写真などがあります。関東のタナゴは「片手に100匹乗る」といわれるほど小さいそうです。

これも無くなった釣りで、利根川のボラ釣りです。こちらに道糸についた枝針があるんですが、これを帆掛け舟で沖に流すんです。いわゆる延縄仕掛けです。沖延縄というのでしょうか。これで上がってきたボラを釣ります。ボラがかかると、船が引っ張り回されるのですぐわかるそうです。

海釣りのほうは、リールが初めて出てきたところで、ここでは波打ち際から錘がついた釣り糸を振り回して投げ込んでいます。大縄釣りというのですが、リールが登場してからなくなった釣りです。

この写真は数寄者の極みで、海の中に櫓を作っています。大東岬、銚子の犬吠よりちょっと南のほうですね。この櫓まで、海を渡っていくんですね。岸から釣るよりたくさん掛かるかもしれないけど、こんな釣りをしていたんです。

これも消滅した釣りで、アオギス釣りです。アオギス自体が幻の魚になってしまいました。非常に警戒心が強く、船の影が見えただけで逃げていく魚です。そこで、脚立の上に乗って釣りをする。脚立がないときは、高下駄を履いて海に入って釣る。

チヌ釣りは、クロダイですね。稚魚より少し大きくなったものです。

鹿児島県のイカ釣りに対しては松崎さんも思い入れが深かったみたいで、薩摩のイカ曳きだけで4枚写真が載っています。餌木は薩摩型と土佐型。昭和のはじめですから、これが席卷していたころです。イカ釣りは、潮と月齢によって餌木を使い分けます。それでたくさん持っていきます。この写真は、釣り人が「どの餌木を使おうか」と悩んでいる場面です。

これは、釣ったイカの掴み方。今ならタモで掬ってしまいますが、このころは首根っこを掴んで、船の外側へ向かせています。そうしないと、自分にスミがかかって、真っ黒になってしまいますから。松崎さんご自身も海賊釣りをやられていて、思い入れがあったのだらうと思います。それで写真の数が多い。

これは鯛釣り。写っているこの方は、当時高知でも指導的立場の人物だったようです。なぜか知らないけど、正座して釣ってらっしゃいます。

ソウダガツオを竿で曳き釣りしてる写真です。東伊豆でムツを。深海釣りですから天秤の下に大きな石の錘をつけています。そうやってより早く沈められるようにしているんです。

これは好対照なんです。年季の入った漁師と、水産学の魚類学の大家である雨宮博士がからんでいる写真です。

これは鹿児島県の枕崎に集まったメジです。クロマグロの子供。11月から12月にかけて、擬餌針はこんなものを使うとか、生きイワシを使うとか、細かく書いています。

当時の遊魚がどんな釣りだったか、ということを書いています。

『釣り技百科』は、釣りの百科事典です。釣りだけでなく、対象魚の生物学的な特性、土壌、餌、道具、合わせ方、そこまで含めて書かれています。書かれたのは、奇しくも海の記念日だったんです。今回のイベントも「海の記念日に何かやりましょう」ということで企画されたのですが、まさかそんな偶然があるとは思っていませんでした。

『釣り技百科』では淡水も海水も取り上げています。淡水に関しては、当時日本の植民地であった台湾や朝鮮も含まれています。北海道も、深い山まで入っています。7月頃に大マスが上がってくるのを釣った、と書いています。これだけの取材ができたのは、朝日新聞というバックがあったからかもしれませんし、ご自

身も釣りに対し非常に熱意を持っておられたのだと思います。最初のところだけ、擬餌針のカラー口絵があります。写真は一部、『日本の釣り』と重複しています。

目を引くところは、関連文献一覧です。江戸時代から昭和16年まで。魚の呼び方は、地方名ではなく標準和名。その魚がどういう習性であるか、口の構造はどうなっているか、漁場の水深はどれくらいか、水温、潮流、仕掛けの作り方、釣り方、餌の選び方、合わせ方まで、詳細に記述しています。

松崎さんご自身も釣りを実践されていますし、全国から組織的に情報を集めています。自分で行けない地方の情報は、地元の方から情報を寄せてもらい「誰それからの情報によると——」と、きちんと情報源の氏名も公表されている。参考文献も、昭和だけでなく明治時代までさかのぼって調べています。

私なりの解釈ですが、松崎明治さんの釣りに深い愛情と、見識を持っておられたと思います。そして釣りというものを、漁撈手段として客観的に見ておられます。食糧を生産する技術の一つであるとしてとらえている。そして全国各地の独特の釣りの技術が研究の対象で、多様性を記録しました。私はそれを“遊魚学”と名づけたのですが、そういう学問体系を作り上げました人物です。『釣り技百科』を論文として東大の大学院に提出すれば、農学博士の学位をもらえらると思います。まさに「日本の『釣魚大全』」です。アイザック・ウォルトンの『釣魚大全』をはるかに凌ぐ内容だと思います。

日本の釣りには、ミズイカとメジナ釣りが出てきます。タバメ、フエキダイ、ミズイカ、アイゴ、クレイオ、メジナ。これはミズイカの昼釣りで、アジを1匹泳がせて、それに抱きついてきたミズイカを釣ります。何匹も釣るうちに餌はポロポロになって、ほとんど骨だけになるんですが、それでも釣れたそうです。アイゴを釣るときは、フナムシを数珠繫ぎにしてフカセ釣りをするんです。錘なしで流すんですね。それでよく釣れた、と書いています。イタチウオは釣りの対象魚ではありませんが、「著者は幼時、素潜りでこの魚をヤスで突いて楽しんで経験を持っている」と書いています。故郷に対して非常に思い入れがあったのだろう、と思います。ミズイカ曳きにも強い思い入れがあったようです。原本を見ると、余白にご本人の書き込みがたくさんあります。鉛筆で、追加の記述があるのです。

知覧町は、枕崎市と頰娃町の間でちょっと海に面しています。ここのご出身です。実家は「知覧型ニツ家」という非常に大きな家で、「家が大きすぎて掃除に困る」といわれるほどでした。この町は海運業が盛んな土地だったんですね。実家も家業が栄え、島津藩から名字帯刀を許された。そういう豪商の3代目としてお生まれになった。聞いた話によると、松ヶ浦から知覧まで、他人の土地を通らずに歩いて行けたそうです。かつて銅像があったそうですが、戦時中の金属供出で、刀3振りと一緒に出されたそうです。

これは昭和初期の松ヶ浦の写真ですが、松崎さんもこういう伝馬船に乗って釣りを楽しんだのだらうと思います。川辺中学校を卒業し、早稲田大学の商学部に進みますが、卒業後にもう一度文学部哲学科に入り直し、朝日新聞社の文化部に配属になります。最初は美術担当でしたが、後に釣り担当になり、退職するまで続けられました。昭和17年に朝日新聞を退職し、松ヶ浦に戻ります。弟さんに話によると、お父さんが亡くなったので家業を継がなければならなくなった事情があったのと、戦争が始まりのんびり釣りをしていられなくなったことも理由のひとつだったのだらうと推測されます。実家で塩の専売をしながら、東大農学部や九大農学部から研究の依頼も受けていたそうです。そして昭和25年に亡くなりました。

これはご実家の納屋に残されていた標本壇ですが、戦時中～戦後の物資不足の時代にも、こういうガラスが手に入ったんですね。おそらく東大や九大から委託されて、ホルマリン漬けにして標本を送っていたのだらうと思います。ビンの中身の標本は、博物館の本村先生に見ていただいたら、非常に珍しいものだとわかりました。

松崎さんは昭和25年に亡くなりました。ご家庭の事情による自殺でした。奥様が亡くなられたことと、ご自身の高血圧がひどかったこと、ご長男に脳性麻痺の障害があったこと、農地改革で土地の大部分を取り上げられたことなどが重なって、命を絶ったと推測されます。

釣りの世界では非常にショッキングな事件で、『水の趣味』誌は「釣り界全体でその死を悼み、釣り仲間たちが発起人となり弔慰金を募り、送った」と書いています。

なぜ、鹿児島大学に松崎文庫があるのか。鹿児島大学と松崎さんを直接結びつける理由は思いつきません。ひとつとっかかりになるのは、岡田喜一先生が書かれた『薩摩烏賊餌木考』です。岡田先生は戦後、郷里の山形で農業でもやりながらのんびり暮らそうと考えていたそうですが、初代校長だった山本清内先生から誘われて昭和22年、鹿児島水産専門学校の教授になりました。そして烏賊餌木と出会ったんです。昭和24年の天皇ご巡幸のときも、烏賊餌木を展示しました。『薩摩烏賊餌木考』の第1項の第1ページに当時の写真が掲載されています。

『薩摩烏賊餌木考』のなかには、知覧町の協力者として松崎明治さんの名前が出てきます。また、巻末に掲載されている参考文献12のうち4つが、松崎文庫の資料か、松崎さんの著作なんです。

烏賊餌木が松崎さんと岡田先生、そして鹿児島水産専門学校、後の鹿児島大学をつないだのかな、と考えています。松崎さんと岡田先生はほぼ同年代なので、気心も通じたのかもしれませんが。戦後の本が少ない時代に、学校の図書館の蔵書も増やしたかった。そういうことで山本清内校長が一肌脱いだのではないかと思います。

『専門学校5周年記念史』という本の中に、松崎文庫に関する記述があります。松崎さんの蔵書および標本の寄付を受けた、と書かれています。山本校長と、岡田先生の尽力があったから、松崎文庫の争奪戦で広島大学に勝つことができたのだらうと思います。

ここで、『釣技百科』に書かれている烏賊曳きがどういうものか、お話をさせていただきます。これは『釣技百科』に載っている松崎さんの図です。こう、餌木を使って釣ります。餌木は月齢、潮の濁り、月の高さによって使い分けます。そのため、たくさん持っています。満月の満中時の明るさを基本にします。最初、餌木は焼いて真っ黒にしていますが、そのうち焼く必要がないことがわかってきて、模様がつくようになりました。

餌木は鹿児島から広まったことは事実ですが、使われている地域によっていろいろな種類があります。共通する点は、比重は1よりわずかに小さいこと。重心位置は前から40%くらい。水に入れたときに姿勢が前傾してお尻の金の部分が若干浮き出る。それを引くんです。緩めると、フラフラッと沈みます。そういう運動をするんです。弱った魚の動きを演出しているのだらうと思います。魚は基本的に背中側の色が濃くて、お腹が白い。それがフラフラ動くと、イカが捕まえにくる。

魚と海老を比べると、海老のほうが細かく動く。それで海老に替わっていったのだらうと思います。

この写真は昔のもの、こちらは現代のものです。「享保年間に池田何某が、椿の松明の燃え殻にイカが抱きつくのを見て、魚型餌木を考案した」と書かれています。餌木の木材は共通して広葉樹の、材が柔らかい木です。木目の間が広いものがよいとされました。時代が下がって偶然の機会から楠が注目され、「どこそこの楠がいい」、という評判が広まると、最初に見つけた人が幹をとって帰り、幹を採れなかった人は枝を持ち帰り、枝を採れなかった人は地面を掘って根を持って帰った。そういうことだそうです。

これは私の研究の結果です。餌木の起源は奄美です。当時は薩摩藩が奄美を支配していました。最近まで奄美大島では魚型の古い型の餌木が使われていました。「ふくぎ」「あまぎ」は南方の木です。沖縄では、サンゴ礁の外側に出られなかった。

この人はもう亡くなられたと思いますが、鉦一丁で餌木を作る名人です。薩摩藩士が餌木を面白がって、鹿児島に持ってきた。そして小型化しました。

餌木を拝見する作法があって、錘の部分と口の部分を持つ。これは、刀を拝見するときの作法に通じま

す。その頃は武士が餌木を使っていました。武士が釣りをしているときは、漁師は漕ぎ手なんですね。そして武士同士で賭け曳きをしていたんです。負けたほうが金を払って、宴会をする。

明治時代になると、旦那衆の粋な遊びになります。どれくらい凄かったかという、私が調査しているときに、明治の末頃に生まれた方が、当時の旦那衆の羽振りのよさを話してくれました。「鹿児島駅の近くに家があり、屋敷の広さは今の小学校くらいの敷地です。屋敷の中にお妾さんの家があって、敷地の中に大きな木がたくさんあって、怖くてそこから先には行けませんでした」と言っていました。そういう旦那の遊びは桁外れだったんですね。烏賊は屋間は海の底で沈んでいるんですが、餌木を沈めれば昼でも釣れることがわかってきた。しかし旦那衆は「屋間釣った烏賊は固くて不味い」といって、意地でも屋間は釣らなかったそうです。

昭和に入ると、満州事件が起きたりして、のんびりしていられなくなった。それで底引きのようにして屋間でも釣るようになりました。

最近では、こういう焼き餌木を使う人はいなくなりました。難しくて使えないんです。昔は、烏賊餌木そのものが魔力を持っていると考えられていました。

松崎明治さんの生家がどこにあるのか、今年の4月まで知りませんでした。川辺町に松崎という地名があるし、松崎酒造という焼酎メーカーもあるので「多分あのあたりだろうな」と見当をつけて探したら、全く違っていました。ではどこなのか、と迷っていたら、ミュージアム知覧の坂元さんから「私の烏賊餌木の論文の別刷りを」というお話があって、何度かメールをやり取りしているうちに松崎さんの話題になり、「私は3年前まで松崎さんの生家の隣に住んでいました」という話を聞いたんです。それで案内していただいたんです。私はうれしさのあまり授業がある日だということを忘れていて、あわてて別の日に変更してもらいました。それくらい興奮しました。

今回の松崎文庫展開催に当たり、図書館長の野呂先生をはじめ職員の方にたいへんお世話になりました。そしてミュージアム知覧の坂元さん、中村さんにもお世話になりました。ここにお礼を申し上げます。